

能界展望(平成7年)

山中, 玲子

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

21

(開始ページ / Start Page)

157

(終了ページ / End Page)

166

(発行年 / Year)

1997-07-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020495>

能界展望（平成7年）

山中玲子

概観

平成7年の能楽界も、ここ数年来の動向と大きく変わることはなかった。いわゆる「薪能」の人気は高く、各地で数多く催された。個人の会や新しい企画の発足、他分野の芸能との交流等もいろいろと試みられ、また、地方での催しも年を追うごとに盛んになっている。そうした地方の催しや個人の会などが増えた結果なのだろうが、東京と関西・九州など他の地方との交流も以前より多くなったようで、従来あまり接する機会がなかった流儀や芸風に触れるチャンスも増えてきているのは喜ばしい。横浜（平成8年6月開場）・名古屋（平成9年4月開場予定）をはじめ、いくつかの都市で能楽堂の建設計画が進められており、各地で能楽はますます盛んになっていくだろうと期待される。ただ催しの数が増えるのではなく、芸の上での交流や相互の刺激があってほしい。いろいろなやり方があるだろうが、「日本全国各地で質の高い能・狂言公演を提供する東西楽師の流派を越えた演能プロジェクト」をめぐって7月に発足した「21世紀の能と狂言を考える会『能楽座』」も、そうした活動の足がかりの一

つになり得るものだろう。

復曲・新作能の試みは本年もあいかわらずさかんだったが、それだけでなく、以前に復曲された作品の再演もいくつか見られた。復曲の場合どうしても不自然さや無理が目につき、やはり現行曲の洗練には及ばない、という結論になることが多いが、こうして上演が繰り返され様々な工夫を重ねていくうちに、少数ではあるうが、いくつかの作品や古演出は、現代の能のレパートリーの一つになっていくのだろう。

一方、梅若雅俊氏（2月）、和泉元秀氏（6月）、宝生英雄氏（9月）、幸正影氏（10月）と、家元や流儀の代表的演者の訃報が相次いだのもこの年の特徴である。世代交代、というには少々早い年齢で亡くなった方が多い。また、一月に起こった阪神大震災の影響は能楽界にも及び、いくつかの催しが延期・中止などの措置をとらざるを得なくなった。また、後述のように各地で義援能・義援狂言が催された。

以下、記録を中心に、項目別に平成7年の能楽界の概要を述べる。

新作・復曲活動

まず新作能から挙げる。2月5日、「長崎観世九阜会特別公演」(長崎市公会堂)で、天草四郎を主人公にした〈原城〉(堂本正樹作)が上演され、5月10日には東京の国立能楽堂で再演された。出演は観世喜之・観世喜正・遠藤六郎・一噌隆之・宮増新一郎・亀井広忠・観世三元伯他。また、3月9日「橋岡会特別公演」(国立能楽堂)では平成5年9月初演の〈望恨歌〉(多田富雄作。出演||橋岡久馬・鏑木岑男他)が再演された。

年末の12月22・23両日には、国立能楽堂で、第五回研究公演「新才能と新作狂言」が催された。過去四回の研究公演は中絶作品の復曲だったが、今回は初めての新作の試みで、馬場あきこ作〈晶子みだれ髪〉と高橋睦郎作〈梅の木〉が上演された。〈晶子みだれ髪〉は、明治の歌人と謝野晶子を主人公に、彼女の青春時代、鉄幹をめぐる山川登美子との心の葛藤などを、三人の短歌・書簡等を素材にカラージュ風に描く。〈梅の木〉は、借金をしている耕作人が、梅の木を眺めている有徳人をだまして借金の証文を破らせる話。各曲の主なスタッフは左の通り。

◎梅の木

作||高橋睦郎。演出協力||小田幸子・野村萬斎。

出演||石田幸雄・野村万作・石田淡朗。

◎晶子みだれ髪

作||馬場あき子。演出||佐藤信。節付||浅井文義。

型付||三鈷の会。美術||辻村ジュサプロ。

台本協力||西野春雄

出演||栗谷能夫(鉄幹)・瀬尾菊次(晶子)・宝生欣哉(登美子)・松橋登・浅井文義・観世暁夫・清水寛二・西村

高夫・岡田麗史・柴田稔・一噌幸政・敷村鐵雄・国川純。

一方、復曲の方は、観世長俊作の〈河水〉を基に大胆に手を入れ1月25・26日の「梅若六郎の会」(国立能楽堂)で上演された〈渴水龍女〉(堂本正樹台本補綴。作曲・演出、梅若六郎。作調・監修、金春惣右衛門)が話題を呼んだ。両日の主な出演者は左の通り。

25日 龍女||片山九郎右衛門、帝王||梅若恭行、

王子・龍王||梅若六郎、敵将||宝生閑他。

26日 龍女||大槻文蔵、帝王||観世鍔之丞、

王子・龍王||友枝昭世、敵将||宝生閑他。

雛子方は両日とも同じで、藤田六郎兵衛・松田弘之(一部連管)、大倉源次郎、山本孝、金春惣右衛門。

喜多流の友枝昭世が参加している他、東京、関西、名古屋の役者が共同で舞台を作っているのも特徴で、最近こうした地域の交流や他流との共演も増えている。

この他、1月14日「大槻文蔵の会」(大槻能楽堂)での世阿弥自筆本〈弱法師〉(大槻文蔵)、2月12日「地照舎」公演(国立能楽堂)での〈布留〉(山本順之)や、2月11日「東京清韻会別会」(観世能楽堂)、19日「梅若会」(梅若能楽学院)での

〔松浦佐用姫〕(11日)大槻文蔵・16日梅若晋矢)、7月16日「梅若会」(同前)での(大般若)(小山文彦・宝生欣哉)等、冒頭に記したように、以前復曲された作品の再演も目立った。今までに復曲された能の中から(実方)(観世栄夫)・(鶴羽)(観世清和)・(重衡)(梅若六郎)・(舞車)(大槻文蔵・友枝昭世)の四曲を選び、一日一曲ずつ上演した大槻能楽堂自主公演の「ろうそく能」(7月12・13・18・19日)のような催しもあった。

完全な復曲というのではないが、古演出の復活や、古台本に基づく演出の工夫も試みられている。4月30日の「国立能楽堂特別公演」では、ほとんど上演されない稀曲(錦戸)をとりあげたが、古謡本を検討のうえ現行謡本では省略されているクセ前後を復活し、貞享松井本をもとに間狂言を出すなどの工夫をしたうえでの上演だった。当日のプログラムにも「シテ・演出/梅若万紀夫、間狂言補綴/野村万之丞」と記され、常の形の上演でないことが示されていた。なおこの演出は、12月1日「錦戸再演の会」(於国立能楽堂)で再演されている。また、7月1日の「橋岡会特別公演」(宝生能楽堂)では(檜垣)に乱拍子を踏む演出が復活された。出演は、橋岡久馬、鏑木岑男、観世清和(地頭)、中谷明、穂高光晴、安福建雄、善竹圭五郎他。後見は観世鍔之丞。

新会発足など

「能・狂言の現行曲を見直し、また、古典の再考と復曲を

試みる」ことをめざし、「新生の会」が発足した。演出・劇作もおこなう野村万之丞が主催。第一回は10月17日、国立能楽堂で行われ、観世長俊作(花軍(間狂言 木実争))をもとに、現行の能・狂言の枠組みにとらわれず、「風流」の要素を重視した形で演出した「花風流」が上演された。初めに岩崎雅彦の解説があり、その途中で舞台上では二つの瓶に花が生けられ(草月と池坊の立合)、上京と下京の男が白菊と女郎花のどちらが美しいかを語り合う冒頭の「婆沙羅ノ段」へとつながっていく趣向も目新しかった。

梅若会は、若手能楽師を中心に、演目の研究・技術の向上を図るために、年四回の「梅若研究能」(梅若能楽学院)を始めた。第一回は4月15日。

金剛能楽堂に対し、平成7年6月1日付で財団法人設立許可が出たのに合わせ、12月23日、金剛能楽堂で、第一回財団公開能(眞服)が上演された。なお、新財団の名称は「財団法人金剛能楽堂財団」。「金剛能楽堂の保存・活用や、金剛家に伝来された貴重な能面・能装束の保存、活用・公開に力を尽くすことにより、能楽の振興と普及を図り、もって京都府における伝統文化の継承振興と能楽を通じた芸術文化の発展に寄与すること」を目的とし、理事長には二十五世宗家の金剛厳氏、常務理事には金剛永謹氏が就いた。

個人の会では、喜多流の友枝昭世が「友枝昭世の会」を興し、5月27日、国立能楽堂で第一回公演(朝長 懺法)が行われた。また7月2日には、故「桜間道雄十三回忌追善能」が

催されたが、同時に「桜間真理の会」第一回となった。

一方、新しい会が多く発足する中、各流宗家の出演による立合形式で長年続いた「朝日五流能」が幕をおろした。最終記念公演(第40回)は8月26日・27日、福岡市大濠公園能楽堂で行われた。

さまざまな催し

阪神大震災の影響が能楽界にも及んだことは冒頭に述べた通りだが、義援のための催しもいくつも行われた。すなわち、3月3日には大阪大槻能楽堂で「義援狂言会」が、6月7日には東京観世能楽堂で「阪神大震災義援能」が催された他、6月1・2日の「京都薪能」が義援能となり、また、早稲田大学演劇博物館振興基金支援公演「狂言鑑賞会」の収益金の一部も震災の義援金にあてられた。また神戸の湊川神社でも「阪神・淡路大震災復興義援会」(4月13日)、「阪神大震災復興祈願能」(4月25・26日)が行われた。

4月27日には国立能楽堂で「企画公演 外国人のための夕べ」第五回が行われた。狂言(子盗人)(野村万作・信行・万之介)と、能(敦盛)(本田光洋・殿田謙吉他)に先立ち、英語による解説「初めてみる人のために」(リチャード・エマー、瀬尾菊次、桜間真理)があり、当日のパンフレットにも6カ国語で簡単な曲目解説が載るといふ形式は、例年通り。ユネスコの世界遺産に登録された法隆寺では、4月5・6日の両日、新宝蔵院建立のための勧進として「法隆寺勧進薪

能」が行なわれ、また、安岐の厳島神社では平成3年の台風で倒壊した国宝の舞台が復興されたのに合せ、10月4日「厳島神社御鎮座千四百年祭奉祝五流能」が催された。

「梅若実二十七回忌・先代梅若六郎十七回忌追善別会能」(3月4日から12月2日まで全国各地)、「観世華雪三十七回忌追善能」(6月3日 宝生能楽堂)、「桜間道雄十三回忌追善能」(前述)等、かつての名人上手たちの追善能が目立ったこと、また、「野村萬斎襲名披露」(10月7日、東京国立能楽堂他)、「萬藏家襲名記念公演」(1月6・7・8日、国立能楽堂他)、「二世七五三襲名披露公演」(12月22日、京都観世会館)等、狂言役者の襲名披露公演が続いたことも、この年の特徴である。

能と歌舞伎

10月27日、東京の「歌舞伎座」の舞台で、同じ素材を扱った能と歌舞伎の競演が試みられた。演目は、昼の部が、能(安宅)(観世鐵之丞、観世栄夫、宝生閑、茂山千作他)と歌舞伎(勧進帳)(団十郎、富十郎他)、夜の部が、能(一角仙人)(梅若六郎、大槻文蔵、福王茂十郎他)と、歌舞伎(鳴神)(団十郎、雀右衛門他)の組み合わせ。こうした試みは日本国内では初めてのことだが、既にヨーロッパでは平成6年に、国際交流基金主催(河竹登志夫総合監修・観世栄夫演出)で、能・文楽・歌舞伎による(俊寛)の比較上演が行われ、好評を博している。同じ題材を扱っても各芸能の持つ美意識の違い

によって、その取り上げ方も処理の仕方も異なるのは当然である。他芸能との競演は、そうした違いを際立たせるだけでなく、「それでは能とは何なのか」を考えさせてくれる上でも有効だろう。〈俊寛〉の比較上演は、国内でも実現してほしいし、このような試みがこれからも続くことを願いたい。

法政大学能楽セミナー

法政大学大学院公開講座の新しい講座として、第一回法政大学能楽セミナーが開講された。戦後五十年にあたる7年は、〈能楽戦後五十年〉というメインテーマのもと一期12回が行われた。講座の詳細は以下の通り。

8月12日(土) 「能楽復興」講師・表章。

「現代演劇との交流」講師・堂本正樹。

8月19日(土) 「市民社会への広がり」講師・小山弘志。

「国際社会の中の能楽」講師・増田正造。

8月26日(土) 「戦後の再出発」講師・横道萬里雄。

「新作・復曲の動き」講師・羽田昶。

9月2日(土) 「狂言の魅力と再評価」講師・小林責。

「狂言役者半代記」講師・茂山千之丞。

9月9日(土) 「能楽研究の歩み」講師・田口和夫。

「世阿弥研究の足跡」講師・竹本幹夫。

9月16日(土) 「わたしと能」講師・馬場あき子。

「映画鑑賞・名家の面影」講師・西野春雄、

引き続き「対談」金春惣右衛門・西野春雄。

以上の6日間で、一講座は90〜100分。対象は一般および大学院生・学部生で、定員約60名のところ、毎回140〜150名ほどの参加があった。

鎌倉芸術館企画公演

平成6年から始まった「鎌倉の能と歴史に学ぶシリーズ」(堂本正樹企画・立案。鎌倉市芸術文化振興財団主催)の、平成7年度の上演曲と、前日に行われた講演の題目は左の通り。

4月8日〈頼政〉 野村四郎。

講演・塚本邦雄「以仁王の乱」

8月26日〈鞍馬天狗・白頭〉 友枝昭世。

講演・山下宏明「源氏潜居」

10月28日〈熊坂〉 大槻文蔵。

講演・水原一「奥州藤原と京都」

能の上演と組み合わせた解説というと、能の筋書きや見所などを前もって説明し、観客がその解説をなぞるように舞台を鑑賞するというものが多いが、そういう形だと、たとえ舞台がよくなくても観客はそれなりに満足してしまうし、逆に実際の舞台がどんなにすばらしくても、先に聞いてしまった解説がじゃまになって感じられなかったりすることもあると思われる。鎌倉芸術館の企画は「鎌倉時代の史実を歴史的経緯を追いつながり取り上げ、能・狂言といった伝統芸能の公演を通じ源氏の勃興と衰退を学んでいく」というもので、従って、講演も決して能の鑑賞のための下準備などではなく、そ

れ自体が重要な柱である。が、能の鑑賞に引きつけて考えてみても、前もって背景となる知識を増やす講演を聞き、能そのものの鑑賞は当日の舞台の出来と観客の感受性に任せるこゝうしたやり方は、手間はかかるが、鑑賞のじまはせず、しかも観能体験を豊かにしてもくれるものだろう。国立能楽堂で毎月最終水曜日に行っている「今月の能・狂言」の解説なども、背景説明という意味ではこの企画ほど徹底はしていないが、能の公演とは別に十分時間をとっている。能のバックグラウンドに対する理解を強化するような企画は、今後も増えていってほしい。

荣誉・受賞など

◎春の叙勲 4月29日付

・シテ方喜多流 粟谷菊生氏
勲五等双光旭日賞

◎春の褒賞 4月29日付

・狂言方和泉流 野村万作氏
紫綬褒章。

◎秋の褒賞 11月3日付

・シテ方宝生流 近藤乾之助氏

◎日本芸術院賞 平成8年3月25日付

・太鼓方金春流宗家 金春惣右衛門氏

真摯で幽玄な芸風を確立し、能楽界の発展に貢献したこと
に対して。

〔略歴〕大正13年9月22日、二一世金春惣右衛門国泰の長男として東京に生まれる。父に師事。昭和11年、〈初雪〉で初舞台。同17年宗家継承。『金春流太鼓全書』等の著書、レコード『能楽囃子体系』『観世流・舞の囃子』の監修、新作能の作調、さらに器楽曲「田園の驟雨」の作曲など、幅広く活躍。平成元年、観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。

同4年、重要無形文化財各個指定保持者認定。

◎重要無形文化財保持者(人間国宝) 4月14日付

・シテ方観世流 観世鍊之丞氏

〔認定理由〕同人は幼少より祖父観世華雪及び父観世雅雪の厳しい指導のもとに修業を積み、これまで各種の曲に好演を見せて来たが、緻密な芸と高い芸格の演能により平成四年芸術選奨文部大臣賞を受賞するなど高い評価を得ており、代表的なシテ方となっている。また復曲、改作上演、海外公演等にも幅広い活動を続けて成果を挙げ日本芸術院賞も受賞している。さらに後進の指導育成にも積極的に尽力している。

〔略歴〕昭和6年1月5日、東京生まれ。七世鍊之丞(雅雪)の四男。祖父華雪(六世鍊之丞)、父雅雪、兄寿夫に師事。昭和9年〈鞍馬天狗〉で初舞台。53年〈卒塔婆小町〉、60年〈椀垣〉、62年〈鸚鵡小町〉、平成2年〈姨捨〉を披演。55年に八世観世鍊之丞を襲名。「世阿弥自筆本による雲林院」「三山」等の復曲・改作上演や、ベニス国際演劇祭(昭和29年)・日本能楽団(同44年)・世阿弥座(昭和47年)平成5年、

計6回)等の海外公演でも幅広く活躍している。観世流シテ方初の人間国宝。

◎芸術祭優秀賞(演劇部門 平成7年度)

・狂言方大蔵流 茂山千之丞氏 「千之丞の会」

◎芸術選奨新人賞(平成7年度) 8年3月13日付

・シテ方観世流 観世清和氏

〈松浦佐用姫〉〈鶴羽〉〈忠信〉など、復曲・改訂に積極的に取り組みで優れた成果を挙げたことに対して。

◎第十七回松尾芸能賞(優秀賞)

・シテ方観世流 大槻文蔵氏

シテ方としての高い力量の他、『源氏物語』をテーマにした六公演や夏の「ろうそく能」等の構成力・企画力、大槻能楽堂自主公演での能の普及活動等も評価された。

◎文化財選定保存技術保持者 3月29日付

・小鼓製作の鈴木理之氏

能楽小鼓(胴・革)の製作・修理。

◎京都府文化賞特別功労賞(第14回) 平成8年1月9日付

・シテ方金剛流宗家 金剛巖氏

◎京都府文化賞功労賞(第14回) 平成8年1月9日付

・シテ方金剛流 豊嶋三千春氏

◎名古屋市芸術奨励賞

・大鼓方石井流 河村眞之介氏

〈平成六年度に追加〉

◎日本芸術院賞 平成7年3月23日付

・シテ方金剛流宗家 金剛巖氏

金剛流二十五代宗家。日本能楽会理事、京都能楽会会長。

〔略歴〕大正13年12月23日、初世金剛巖の三男として京都に生まれる。父に師事。昭和6年〈国栖〉の子方で初舞台。26年、初世金剛巖の急逝により宗家を継承。39年〈卒塔婆小町〉、44年〈鸚鵡小町〉、59年〈姨捨〉披露。〈泰山府君〉〈碁〉の復曲にも取り組み、また59年には史上初めてローマ法皇の前で〈羽衣〉を上演した。

日本能楽会・能楽協会関係

◎日本能楽会

【役員構成】

《会長》 宝生英雄

《常務理事》 観世清和・金春信高・宝生英照・金剛巖・喜多

六平太・宝生閑・金春惣右衛門・善竹幸四郎

《理事》 野村四郎・井上嘉久・大槻文蔵・高橋汎・辰巳孝・

廣田隆一・大島久見・福王茂十郎・貞光義明・藤田大五

郎・鶴澤壽・宮増純三・安福建雄・山本孝・観世元信・野

村又三郎

《監事》 一噌庸二・檜常太郎

【会員数】(平成7年7月31日現在)総数379名

シテ方 観世176 金春8 宝生34 金剛11 喜多18

小計247

ワキ方	高安 9	福王 5	宝生 5	小計 19		
笛方	一噌 5	森田 12	藤田 2	小計 19		
小鼓方	幸 10	幸清 5	大倉 7	観世 2	小計 24	
大鼓方	葛野 5	高安 5	石井 4	大倉 5	観世 1	小計 20
太鼓方	観世 5	金春 9				小計 14
狂言方	大蔵 25	和泉 11				小計 36

◎能楽協会

【役員構成】

《理事長》	片山九郎右衛門
《常務理事》	梅若六郎・坂井音重・武田志房・櫻間辰之・廣田泰三・香川靖嗣・宝生閑・亀井忠雄・山本則直
《理事》	浅見真州・守屋泰利・朝倉桑太郎・寺井良雄・金剛永謹・大村定・福王茂十郎・一噌仙幸・鶴澤速雄・三島元太郎・中村喜彦・野村万之介
《常務理事・東京支部長》	高橋章
《理事・名古屋支部長》	野村又三郎
《理事・北陸支部長》	山田太佐久
《理事・京都支部長》	片山慶次郎
《理事・大阪支部長》	大槻文蔵
《理事・神戸支部長》	吉井順一
《監事》	渡辺三郎・檜常太郎

【会員数】147名

支部別 東京64 名古屋92 北陸52 京都190 大阪254
神戸66 本部扱159

物故者

●小西保二郎氏

シテ方観世流。2月3日、急性肺炎のため、大阪吹田市の病院で死去。享年83歳。明治44年6月16日生まれ。昭和2年大西新三郎に入門。50年より日本能楽会会員。『観世』5月号に追悼記事あり。

●梅若雅俊氏

シテ方観世流。2月10日、肺炎のため、入院先の世田谷区の病院で死去。享年85歳。梅若会所属。明治43年1月2日、五四世梅若六郎(実)の次男として東京に生まれる。父に師事。初舞台は大正7年。兄の五五世梅若六郎、弟の梅若恭行、現当主五六世梅若六郎らとともに梅若会を率いてきた。昭和42(46)年、能楽協会理事。日本能楽会会員。56年勲五等双光旭日章受章、60年芸術院賞。『梅若』315号(4月)に追悼記事あり。

●鷺尾星児氏

国立能楽堂元主幹。4月5日、ガン性腹膜炎のため死去。享年66歳。『金剛』144号(9月)に記事あり。

●郷郭太郎氏

シテ方観世流。4月26日、アレルギー性紫斑病のため、調布市の病院で死去。享年80歳。大正4年4月28日、東京に生

まれる。武田太加志に師事。昭和50年より日本能楽会会員。
『観世』12月号に追悼記事あり。

●江島尤一氏

わんや書店会長、前社長。5月9日、心不全のため死去。
享年68歳。日本能楽会の監事・審議委員等を歴任したほか、
能楽養成会、全国学生・OB謡会の世話役等もつとめ、能楽
の普及につとめた。故江島伊兵衛氏の長男として、鴻山文庫
の能楽研究所への寄贈に際しては、特に尽力頂いた。『宝生』
11月号に追悼記事あり。

●和泉元秀氏

狂言方和泉流第一九世宗家。6月30日、脳出血のため、東
京港区の病院で死去。享年57歳。昭和12年7月18日、故九世
三宅藤九郎の長男として生まれる。父三宅藤九郎に師事。初
舞台は昭和16年。18年、山脇和泉家の養子となり宗家継承。
和泉流の2曲を完演したほか、藤九郎原作「じゃじゃ馬馴ら
し」等、シェイクスピア作品をもとにした狂言で外国公演を
行うなど、国際的な活動も知られていた。『宝生』8月号に
追悼記事あり。

●守家金十郎氏

大鼓方観世流宗家代理。7月28日、腎不全のため死去。享
年101歳。明治26年10月10日、岡山県に生まれる。前名は守家
幸正。加藤幸直、山本敬一郎に師事。初舞台は大正5年。明
治以来宝生練三郎派と呼ばれていた同流の芸を守ってきたが、
昭和61年に流儀の名称を観世流に戻すことが能楽社界に認め

られ、宗家代理となった。日本能楽会会員。昭和63年度に第
一回催花賞を受賞。『金剛』145号(8年1月)に記事あり。

●野村広二氏

能楽評論家。8月10日、心不全のため死去。享年82歳。大
正3年3月、名古屋市に生まれる。初めはNHKに勤務し、
後、能楽評論家として名古屋を中心に活躍。『能楽の友』な
どに健筆を振るった。『金剛』144号に記事あり。

●宝生英雄氏

シテ方宝生流第一八世宗家。9月14日、心不全のため死去。
享年75歳。大正9年2月18日、一七世宗家宝生九郎重英の長
男として東京に生まれる。初舞台は大正14年。昭和49年宗家
継承。平成元年紫綬褒章受章。同6年勲四等双光旭日章受章。
日本能楽会常務理事・会長。社団法人宝生会会長。東京芸術
大学音楽学部邦楽科講師。『宝生』12月号は「宝生宗家追悼
特集号」。

●前島久男氏

能楽写真家。10月20日、心不全のため死去。享年71歳。大
正13年3月8日生まれ。東京目黒で商業写真館を開いていた
父の仕事を子供の頃から手伝っていたが、昭和の初め、二四
世観世左近に勧められ、正式に「能楽写真家」となり、以来
60年にわたって能楽写真一筋に撮り続けた。前島氏のもとか
ら独立して現在活躍中の能楽写真家に、宝生写真部の亀田邦
平氏、喜多流写真部のあびこ喜久三氏がいる。『観世』12月
号、『金剛』145号に記事あり。

● 幸正影氏

小鼓方幸流第一七世宗家。10月24日、大腸癌のため、東京品川区の病院で死去。享年71歳。大正13年10月4日、小鼓方幸流十六世宗家幸祥光の長男として東京に生まれる。前名は三須錦吾。父に師事。初舞台は昭和9年。同43年11月、幸正影と改名。53年、幸流小鼓方宗家継承。日本能楽会会員。能楽協会理事、東京芸術大学音楽学部邦楽科講師等を歴任。国立能楽堂養成所幸流小鼓方主任講師。『宝生』12月号に追悼記事あり。

● 豊嶋一喜氏

シテ方金剛流。12月10日、肝臓癌のため、広島県呉市の病院で死去。享年58歳。昭和12年11月10日、豊嶋豊の長男として生まれる。父及び二世金剛巖に師事。西日本金剛会会長。日本能楽会会員。『金剛』145号に記事あり。